様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０３８１９

研究課題名（和文）現代日本の家族生活と労働システムの相互性に関する研究：英国との比較から

研究課題名（英文）The interaction of family life and work system in Japan: from a comparison with the United Kingdom.

研究代表者
品田　知美（Shinada, Tomomi）

早稲田大学・文学学術院・その他（招聘研究員）

研究者番号：００５７３０４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：この研究は、現代日本において小学生がいる家族の生活と労働システムにおける相互性を、英国との比較から分析した。英国では日常的に「家族全員が共に過ごす時間をとること」が重視されている。一方、日本では妻の働き方によらず夫が夕食までに帰宅できない日常の下で、夫が家にいるべきだという価値意識は希薄である。
　では、日本における家族を持つ意味とはなにか。家を継ぐ子どもを教育することである。親たちはそのために金銭や時間資源を確保／配分し未来に向けて家族生活を営んでおり、子どもを塾や習い事へ参加させることが、家族や友人たちと共に過ごす価値よりも重視されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究は異なる水準のデータを扱うという点でミックスドメソッドによる研究の一種である。インタビューデータに先立って、現代日本の親たちの時間量の変容を踏まえることで、聞き取りの内容を焦点を絞ったものとしている。言語の異質性を踏まえつつ、頑健な社会比較をするための研究枠組みのもと遂行された。価値意識に照射する研究は、政策が一定程度進んだいまこそ意義がある。女性の地位や少子化など、現代日本社会が直面している問題を考察するために、重要な論点が抽出され、個人が社会に具体的な変化をもたらす可能性の端緒について示唆を得られた。

研究成果の概要（英文）：This study suggests that the differences between Japan and UK family who have primary school-age. UK families expects to spend time together in their daily lives. On the other hand, Japanese wives do not expect that their husbands come back by dinner time. These suggest that the central values of having family are quite different in those two countries. Japanese parents have their children participating in many kinds of activities after schools. UK family enjoy having time together with their friends or kin on daily lives.

研究分野：社会学

キーワード：家族　家事　育児　労働　子ども　イギリス　生活時間　教育

１．研究開始当初の背景

日本では現在、合計特殊出生率がやや上向いたとはいえ 1.4 程度にとどまっている。希望出生率 1.8 との差があることから、子どもを持ちたいが実現できない理由は何か、様々な観点から研究が進められてきた。現時点で重要と考えられるに至った因子として、長時間労働が是正されていないこと、女性が出産により労働継続が困難となることなど、ワークライフバランスの実現の難しさがあげられる。

ところで、日本社会が全体として無償労働に配分してきた時間は国際比較でみると相対的に少ないなか有配偶女性に一極集中してきたことが知られている。また、日本女性は炊事時間が相対的に長く育児時間は短いという特徴がある。近代化とともに母親の家庭での教育役割が高まり、世界的にも育児時間が増大する傾向があるなかで日本も例外ではなく、このトレンドが家族に与える影響は大きい。

イギリスは長らく核家族中心の社会であり、北欧ほどに手厚くない福祉政策のもとワークライフバランスを重視し、比較的ヨーロッパでは労働時間が長い国として知られている。したがって、世代間で支援の望めない家族がどのような生活様式を営んで調和を維持しているのかについて、参考にすべき点および同時に生じている社会問題について示唆を得ることができる。

２．研究の目的

世代間の子育て支援が受けられない人々であっても、生活の質を維持しながら子どものいる家族生活を営めるワークライフバランスを保てることが少子化への重要な方策であるという認識のもとで、本研究は、日本および英国の核家族において、日常の生活様式の選択および水準維持が、子どもを持つことや働きかたへの価値意識とどのように関連しながら現実に選択されているのか、ミクロな家族システム内で生じている力学に関する知見を得ることを第１の目的とする。その上で、子どものいる核家族のワークライフバランスを実現するにあたり、生活領域で希求されていることと、現代日本の労働システムには、どのような点において齟齬が生じているのかについて理論的に考察することが第２の目的である。

３．研究の方法

1.日本の子どものいる母親および父親の生活時間を社会生活基本調査報告を用い、過去 10 年の変化を整理する。2.生活様式に影響をもたらすと考えられる情報メディアにより、期待される生活水準見通しを得る。3.小学生の子どもを持つ母親に対して日本およびイギリスでインタビューおよび観察調査を実施する。４．母親たちの生活時間および生活様式に関する期待水準を踏まえて、インタビュー及び観察から得られる結果を解釈し、現代日本の家族生活領域および労働を含む社会システム上のどこに、ワークライフバランスを実現する上での困難があるのかについて理論的に考察する。

４．研究成果

1）小学生の子を持つ親たちの生活時間の変化

社会生活基本調査報告 2001,2006,2011 年版調査票 A、および調査票 B の集計表から、小学校低学年、高学年の子どものいる核家族の父親と母親の生活時間を項目ごとに比較した。なお、総務省のオンサイトデータ試行利用の許可を得てミクロデータの分析も行ったが、現時点で持ち出し審査が終了せず公表できないため、以下集計表にもとづいた結果のみについて言及する。

母親が大半の家事育児を引き受ける現状に変化はみられなかった。父親たちの長時間労働は緩和されるどころか、高学年の子どもを持つ父親は過去 10 年で 1 日あたり仕事時間が 25 分も増えていた。また、低学年の子どもを持つ母親たちの仕事時間が 11 分増えるなど、有償労働への早期復帰が進んだ。それに対して家事時間は変化があまりなく、育児時間に関してはすべての父母が明確に増加したといえる。つまり、親たちは過去 10 年の間にさらに多忙になったと結論できる。

Figure 1 Child Care Time

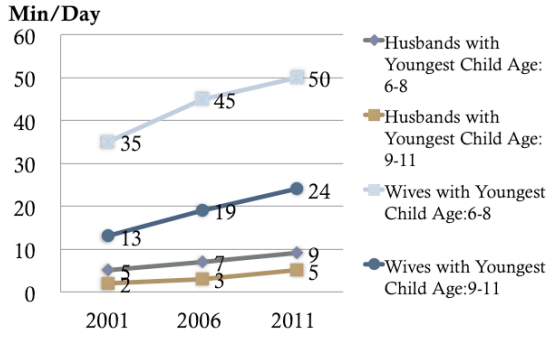
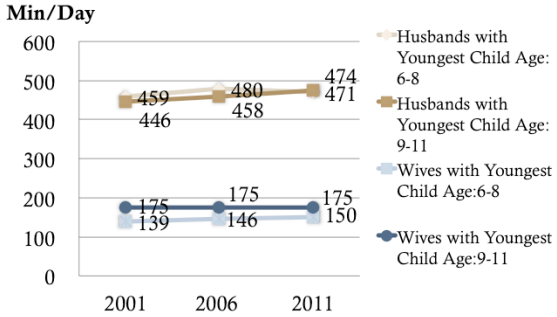


Figure 2 Paid Work Time



2）日本の生活雑誌における記事内容の分析

2016 年の首都圏におけるスーパーマーケットに置かれている一般的な生活雑誌について、都心、郊外、村落地域ごとにサンプリングし、11 冊を選択して衣食住の水準に関わる記事内容を分析した。

衣生活：衣類に関する記事はあまり多くない。内容は、以下に少ない衣類でさまざまなコーデを着回すかといったものが多く、要らない衣類を持たないといった物減らしのための記事も多い。一方、衣類の保管や修繕方法、洗濯、裁縫関係の記事はほぼ存在しない。

食生活：生活雑誌の記事は圧倒的に「食」関係のものが多い。ただし、それぞれの記事が読み手に対して提示している食生活の想定水準は、記事ごとにかなりのばらつきがある。その傾向は掲載雑誌によっても変わるし、同じ雑誌に収録されたものであっても、やはり記事ごとの偏差がかなりある。現実として読者の食生活水準には差があるということが、雑誌記事作成の際にも実質上の前提となっていると思われる。

住生活：生活総合雑誌では、そもそも「住居」に関する記事自体が、「食」の記事に比べてかなり少ない。記事がある場合も、内容は圧倒的に「収納」「整理整頓」「片づけ」に偏る。こうした収納記事の多さの背景には、日本の住居の狭さや、その割にモノが多すぎるという問題が考えられる。

3）現代イギリスにおける小学生の子どもを持つ母親へのインタビュー調査から

2017 年 7 月から 8 月にかけて、ロンドンおよび近郊地域において小学生が 1 人以上現在いる女性 1 時間程度の半構造化インタビューを行った。首都圏であるロンドン近郊には外国のルーツを持つ人が多い。内容分析をとおして浮かび上がってきたのは、現代イギリスにおける「家族を持つことの意味」がシンプルに「共に時間を過ごす近しい仲間を持つこと」だという点である。インタビュー結果を統一的に解釈するならば、共に時間を過ごしたい相手としてパートナーを選び、子どもを持つことで共に時間を過ごす仲間を増やし、その延長に親族や友人、近隣の人を招く社交を定期的に続け、場所として住居という空間が重要となる。ふだん家族が夕食時にそろわない事例はシェフのような特別な職業をのぞくと皆無で、エスニシティや就業状況による違いのない共通の価値意識が見出された。

4）現代日本における小学生の子どもを持つ母親へのインタビュー調査から

2018 年 2 月から 3 月にかけて、一都三県において小学生が 1 人以上現在いる女性 1 時間程度の半構造化インタビューを行った。内容分析によると、日本の家族はイギリスとは大きく異なる価値意識のもとで日常生活が営まれている可能性が示唆された。イギリスとの差異が明確である点を列挙すると下記のとおりである。

・仕事をしているしていないにかかわらず、家と子どものことは妻が担当している。
・仕事は家と子どものことに妻が対応できる範囲で、主に妻方親族をあてにして探される。
・夕食時に夫が戻っていることはほとんどない。
・家族の空間に妻方の親族以外の成人が来ることはない。

・妻は家族成員全員と、つまり夫ともっと過ごしたいとは望んでいない。

以上をまとめると、日本の子どものいる家族はいまここで共に過ごす時間を希求することよりは、家族を継承するという機能が重視され、妻子というユニットと夫は別の関係性を保っている。また、娘と息子との関係性構築には差異がみられ、ジェンダーの再生産が生じている。イギリスとは対照的な価値空間が支配的であることから、馴染まない意識を持つ人々が子どもを持つためのハードル非常に高い現状が示唆される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　　0 件）

〔学会発表〕（計　　2 件）

Tomomi Shinada, The Trends of Parents' Unpaid Work Time and Children in Japan 2001-2011, 39th Conference of the International Association for Time Use Research, 2017.

品田知美、現代イギリスにおける家族を持つことの意味：小学生のいる女性へのインタビューから、第 91 回日本社会学会大会、2018.

〔図書〕（計　　0 件）

〔産業財産権〕とくになし

〔その他〕

品田知美、母と息子のニッポン論、晶文社スクラップブック、2018.
(http://s-scrap.com/sign_14shinada)

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：田中理恵子
ローマ字氏名：Tanaka Rieko
所属研究機関名：國學院大学
部局名：経済学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：60783719

(2)研究協力者

研究協力者氏名：野田　潤
ローマ字氏名：Noda Megumi

研究協力者氏名：高橋　幸
ローマ字氏名：Takahashi Yuki

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。